

保育施設に設置されるすべり台の歴史的変遷

久留島太郎¹ 境 愛一郎² 秋田喜代美³
大澤 洋美⁴ 箕輪 潤子⁵ 宮田まり子⁶

Research on Historical Changes in Sliding Slides Installed in Early Childhood Education and Care Facilities

KURUSHIMA Taro SAKAI Aiichiro AKITA Kiyomi
OOSAWA Hiromi MINOWA Junko MIYATA Mariko

本研究の目的は、保育施設に広く設置されている固定遊具のひとつである「すべり台」が、我が国における最初の幼稚園が創設された1876（明治9）年頃より現在まで、どのようにして保育の場に位置づけられてきたのかを検討することとする。その方法として、各地の保育所・幼稚園の記念誌や沿革史などに記録された写真資料や、当時の保育用品カタログ資料を分析した。すべり台の設置は、保育に関連する施設の設置基準に位置付けられる前より、園の遊具として広く取り入れられていた。すべり台が保育施設に浸透した要因には、幼稚園や保育所の設置基準の変化、保育用品の開発や社会情勢の変化などがあることが示唆された。

キーワード：すべり台、固定遊具、遊び、園庭、保育

1 問題と目的

固定遊具であるすべり台は子どもたちが遊ぶ環境に広く設置されている。公園の遊具に関する国土交通省の調査^{注1)}によると、平成26年度の都市公園およびその他の公園におけるすべり台の設置数は67,610台であり、砂場60,677基、踏み板式おらんこ70,868基に並ぶ最も多く設置されている遊具のひとつとなっている。また、日本スポーツ振興センターによる『固定遊具の事故防止マニュアル～学校（園）における安全教育・安全管理のポイント～』（2021）^{注2)}によると、認定こども園・保育所では設置率が一番高い固定遊具であり、幼稚園においても鉄棒の次に設置率の高い固定遊具と報告されている。このように子どもたちにとっては身近な固定遊具のひとつである。

固定遊具の遊び研究においては、幼児の固定遊具遊びにおけるルールの変容について検討をした金子・境・七木田ら（2013）のものがある。そこでは、幼児が固定遊具に能動的に関わりながら遊びを生み出す一方で、遊具の使われ方は保育者の教示や園のルールなどに影響を受けるといったことが明らかにされている。また、龍田ら（2019）の園庭の鉄棒と太鼓橋に着目した研究においては、固定遊具が子どもたちの身体の動きと他者との関わりを促すものであることが指摘されている。すべり台の機能として、仙田（1998）は「2歳ごろの、すべり台を普通にすべる機能的段階、3歳頃の技術的に工夫し、あそびを開発していく技術的段階、4歳ごろの『ごっこ遊び』の社会的段階」といった、子どもの発達に応じて必要な機能を有する遊具としての有用

1 植草学園短期大学
2 共立女子大学
3 学習院大学

4 東京成徳短期大学
5 武蔵野大学
6 白梅学園大学

性を指摘している。

このように遊具の機能やその取り扱われ方についての検討がされてきている一方で、すべり台という具体的な遊具の歴史に関するものについては、幼稚園のすべり台に注目し、園庭に関する規定や築山との関連について検討をした田実・橋彌（2010）のすべり台の歴史に関する報告^{注3)}が確認できる程度である。

そこで本研究では、保育の場において子どもたちにとって身近な固定遊具として浸透しているすべり台の変遷について明らかにすることを目的とする

2 方法

保育施設に設置されているすべり台の実際を概観するために、保育施設の記念誌や沿革史などに記録されている写真記録を資料とし検討した。次に保育用品としてのすべり台の変遷を概観するために、保育用品のカタログを資料とし検討を行った。

沿革史は、各地域の保育施設の記念誌などが保存されている野間教育研究所図書室、国立大学附属幼稚園の沿革史が保存されている千葉大学教育学部附属幼稚園の協力を得て資料を得た。明治時代から昭和にかけての写真が掲載された50園の沿革史から得られた79の写真資料、園庭図などの図を対象とした。その年代と特徴（設置主体、形状、材質など）について写真からの判断が可能なものを分類し、すべり台の設置に関わる法令や設置基準などの変遷とその設置の実際とを併せて検討をした。（資料1を参照）

保育用品カタログは、沿革史などから得られた写真記録と同年代のカタログを参照した。本研究においては創業が1907（明治40）年と国内で最も古く、保育用品カタログの記録が社史から確認できたフレーベル館の資料を対象とした。

3 結果と考察

（1）保育施設とすべり台

a. 幼稚園の誕生から恩物中心の保育からの進展期

1876（明治9）年に創設された我が国における最初の幼稚園である東京女子師範学校附属幼稚園の園庭にすべり台は設置されていたという記録は確認できない。また、倉橋ら（1930）^{注4)}も明治14年の保

育計画における戸外遊戯について「今日の如く、幼児のための戸外運動具、ぶらんこ、すべり臺などはまだ備へてなかつたので、自然、鬼ごっこ、かくれん坊、石けり等が主として行はれた。」と指摘している。これらのことから、この時期に保育の場には、まだすべり台が見られなかったことが推察できる。

幼稚園は東京女子師範学校が創られた後、徐々に東京、大阪、鹿児島、仙台などの各地に創られ、1900（明治33）年には幼稚園数が全国で240園（官公立179園・私立61園）に、1912（明治45）年には533園（官公立224・私立309）となっている^{注5)}。幼稚園が全国に普及すると同時に、明治後半には、欧米に起った児童中心主義、生活主義の影響を受け、自由保育、統合主義保育などの幼児の自然な活動を主体とする保育への移行も進んだ。

明治初期の1886（明治19）年に全国園数が約40園となったが、その中のひとつである長崎大学教育学部附属幼稚園の桜馬場時代（明治19年～大正12）年の記録（園庭図）^{注6)}にすべり台が確認できる。1886（明治19）年の園舎図に記載されている藤棚と砂場と一緒に設置されているものである。図からは滑り面が一つのものであることが想像できる。

明治後期の記録写真としては、長崎市立長崎幼稚園^{注7)}の園舎落成式の写真に園庭に設置された木製のすべり台が確認できる（図1）。正門を入ってすぐの場所に設置された木製のすべり台であり、すべり台が1面であることが当時の別の写真からも確認できる。

1887（明治20）年に開園した東京都文京区立第一幼稚園^{注8)}の「九十年のあゆみ」には遊具について「40年頃までは、すべり台とぶらんこのみのものであるが、40年頃からすべり台とシーソーが設備されたようである」との記述がある。また、子どもが遊ぶ姿が写真として確認できたのは、1909（明治42）年の岡山大学教育学部附属幼稚園の記録写真であった（図2）。そこでは滑り面が2面で木製のすべり台で遊ぶ子どもたちの様子が確認できる。地域の保育への影響が大きい国立大学教育学部の附属幼稚園にすべり台が設置されていることから、その地域の幼稚園への普及につながったことが推測できる。

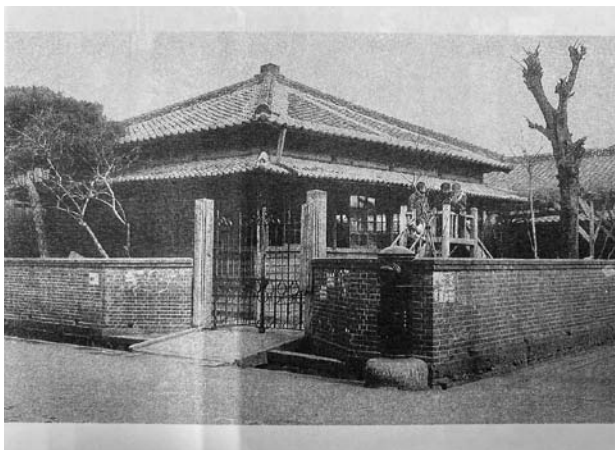


図1

出典：長崎幼稚園創立100周年記念誌（1993）



図2

出典：岡山大学教育学部附属幼稚園 附幼百年の歩み（1985）

1878（明治11）年に東京女子師範学校附属幼稚園監事だった関信三が記した「幼稚園創立法」や、東京女子高等師範学校教授・兼附属幼稚園主事であった中村五六が1893（明治26）年に記した「幼稚園適要」にも特定の固定遊具についての記載はない。唯一確認できるのは1911（明治44）年にフレーベル館の創設者である高市次郎が恩物以外の保育用品を研究する中で、独自に保育設計を記した「保育法便覧」^{注9)}の中にある幼稚園設計概要で「恩物並ニ運動用具ノ部」という項目の中に「軽便滑台 一基 三円八十銭以上」として、すべり台を位置付けている。

幼稚園の園庭などの設備についての明確な規定がなかったこの時期に、ぶらんこや砂場、すべり台などが普及した背景には、当時の学校や公園に青少年の運動器具として設置されていたものの影響があることが推測される。しかし、写真の記録にあるすべ

り台が、青少年向けの大きなものではなく、子どもの体の大きさに合わせてものになっていることから、加工のしやすい木材が使用することで、子どもの体にあったサイズに製作されたことが推察できる。

大正時代は15年という短期間ではあるが、この期間に幼稚園の設立が大幅に増え、その数は明治末期の2倍の数になった。大正時代の写真記録からは、それまでは着物であった子どもたちの服装が洋服に変わってきていることが確認できる。大正時代は、明治時代の流れから保育の考え方が、幼児の個性を尊び、自発的な活動を重んじるように変わりつつも、それまでの恩物中心的保育の見直しなどもあり、多様な保育観が存在した時代でもあった。

1926（大正15）年に公布された「幼稚園令」や「幼稚園令施行規則」にはすべり台に関する記述はないが、大正時代の幼稚園の特徴が「幼稚園教育九十年史」文部省（1969）には次のように記されている。

明治年間に建てられた幼稚園は、一般に、園舎には十分に注意が向けられたが、屋外遊園にはほとんど注目されなかった。大正時代に入ると、戸外の保育活動が活発となって、屋外遊園がかなり広くとられるようになった

柴崎（2006）は、この時期に戸外での保育活動が活発になった背景には日露戦争前後に、日本の子どもたちの体力の低さの原因が幼児期からの知的な文化活動中心の幼児教育にあるという批判にあると指摘する^{注10)}。その批判に応える過程に、すべり台やジャングルジムなどの固定遊具の工夫や、園外での保育活動が増えたことがあるとしている。これらのことから、固定遊具としてのすべり台が子どもたちの自発的な体の動きを促すことのできる遊具として位置付けられていた時期であることが推察できる。

b. 関東大震災と保育内容の自由化期

今回の調査で、この時期のすべり台に関する図面・写真は15件確認できた。そのうち14件が関西地域の記録であり、そのうちの9件は明治時代に設立された園のものであった。大正時代の関東地域の写真が少ないのは、関東大震災の影響により資料が失われてしまったことも示唆される。写真から判断できる特徴としては、明治期同様に木製のすべり台が中心で

あるが、形状が多様になってきていることが分かる。

すべり面が2つになりすべり台の上に踊り場のような場所が作られたり（図3）、階段を登ってすべり面が放射状に伸びていたり、富士山型（階段を登ると左右にすべり面が振り分けられているもの）、すべり台の下が物置になったりしているものなども確認ができた。また、子どもたちの背丈よりも低いもの、高いもの、サイズの大きさなども異なるものがあった（図4）。

保育の場におけるすべり台が多様になってきた背景には、明治末期の1911（明治44）年に幼稚園の設置に関わる小学校令施行規則の一部が改正され、保育内容の自由化が進んだことがある。1887（明治20）年には、公立園数の1/3程度であった私立園が、1916（大正5）年には公立園の約2倍になっている。

この時期の記録写真から確認できるすべり台は木製のものが多く、形状も園ごとに異なり工夫されていることから、これらは園ごとが独自にあつらえたものであることが推測できる。



図3

出典：松崎幼稚園創立80周年記念誌（1998）



図4

出典：幼児保育百年の歩み（1981）

c. 保育内容の自由化期から第二次世界大戦前期

津守（1959）によると、アメリカにおいては、新教育運動が実際の保育に影響を与え始めた1920年代から1930年代に、進歩的な幼稚園にすべり台やぶらんこ、シーソー、よじ登る棒や綱などが見られるようになったとされている^{注11)}。昭和に入り、キリスト教由来の私立園が増える中で、アメリカなどの海外の保育環境が大正時代に引き続き、日本国内の園の環境にも影響を与えたと考えられる。

大阪市立愛珠幼稚園には1931（昭和6）年に新しく鉄製の高さ3.8mの回転（らせん式）すべり台が設置された。このすべり台の形状は1927（昭和2）年にフレール館より発売された「米国式鉄製廻転滑台」^{注12)}に形状が似ている。名称が米国式とあることから、ここからも昭和初期のすべり台がアメリカなどの影響を受けていたと推察できる。

中央社会事業協会社会事業研究所と愛育会愛育研究所が協力し昭和15年から2年かけて実施をした「本邦保育施設に関する調査」^{注13)}によると、「戸外に備え付けの遊具や教具」についての質問に対し、回答総数169園のうち92.1%の園がすべり台を設置しているとしている。この調査では室内遊具についての回答も求めているが、室内にすべり台が設置されている施設は75.6%となっている。

この時期になると、すべり台の素材が木製だけではなくてくるのが写真から確認できる。記録からは木製のすべり台18に対して、木以外の素材が含まれているすべり台が33確認できた。この中には木と鉄を組み合わせたもの、石やコンクリートなどに見えるもの、滑り面の材質が変わっているものなども含まれる。昭和に入り、学校用の机や椅子なども木製からスチールパイプ、合板や合成樹脂などを使ったハイブリッドのものになってきたことや、木よりも細かい加工がしやすく、商品として大量生産にも適していることなども影響していることが推測できる。

昭和11年頃とされる記録写真には、すべり台とぶらんこ、ジャングルジムとすべり台が組み合わされたもの（図5）が確認できる。

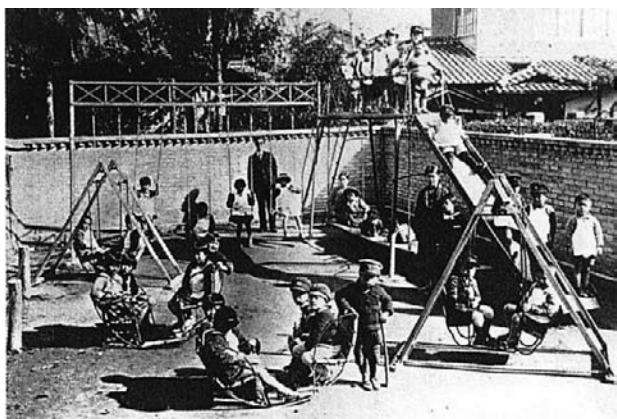


図5

出典：幼児保育百年の歩み (1981)

d. 第二次世界大戦後の復興期

戦後の復興期に、昭和30年代になると、すべり台が遊具の一部として取り入れられたものとして「総合遊具」という名称が見られるようになる。1955（昭和30）年の千葉大学教育学部附属幼稚園の記念誌「附幼80年のあゆみ」（1983）には、当時の宮内孝園長がアメリカへの視察から戻り、アメリカの幼稚園にあった森林の木に取り付けられた木製の遊具にヒントを得て、園庭の楓の木に矢倉とすべり台を合わせた遊具を作り、それを「総合遊具」としたとの記録が残っている（図6）。



図6

出典：千葉大学教育学部附属幼稚園80年のあゆみ (1983)

『幼稚園教育百年史』（1979）には、昭和30年代から40年代前半の幼稚園設備について「幼児教育の発展に伴って、園具や教具の製作販売に乗り出す業者が増加し、新材料の開発とあいまって新しいものが次々に製作された。しかし、大量生産による画一化をもたらしたり、教育的に価値の低いものや安全性

を欠くものまで売り出されたりした」とその特徴が示されている。昭和36年には「学校体育用品基準」が告示され、幼稚園用すべり台などの企画基準が明示されたことは、実際に上述のような背景があったからであろう。

また、昭和30年代から40年代前半にかけて屋外設備としての固定遊具が数多く設置されたことにより、運動場での幼児の活動が制限されるといった状況が生まれたとの記述もあった。そのことが要因となり、運動場を広く設定する方向に転換された時期でもあると記されているが、運動場（園庭）を広くすることが難しい場合などでは、すべり台やジャングルジムなどの機能が一体的になった総合遊具などを独自に設置することで、広場の確保を目指した園などもあったのではないかと推測する。

e. 「保育要領」の刊行から現在まで

すべり台の公的な位置付けとしては、1948（昭和23）年に文部省の幼児教育内容調査委員会の作成した幼児教育要領を基に作成された「保育要領」の「四 幼児の生活環境」の「3 遊具」という項目の中にすべり台についての次のような記載がある。

幼児がよく集まって遊ぶすべり台、ぶらんこ、砂場、ジャングルジム等は相互にじゃまにならないように離れたところに置くとよい。

また50人の幼児のために理想に近い設備として、すべり台は1台とされている。設置の義務はないものの、子どもたちの遊びに必要な遊具であることが公的に示された。昭和初期の写真にはすべり台と砂場が近くに設定されていたり、すべり面が砂場につながったり、遊具同士がつながっているものなども見られる。遊具同士が近くに配置されたことで、相互の遊びが干渉しあったり、動線がぶつかったりすることがあったことから、保育要領にこのような記載がされたのではないかと推察できる。

1952（昭和27）年には「幼稚園基準」が通達として出され、1956（昭和31）年には「幼稚園設置基準」が公布された。設置基準の第10条に、幼稚園に備えるべき園具・教具が規定され、その二項に「すべり台、ぶらんこ、砂遊び場」が示されることとなった。また、保育所については「児童福祉施設最低基準」



図7

出典：鳴門教育大学附属幼稚園創立100周年記念誌（1993）



図8

出典：岡山大学教育学部附属幼稚園附幼百年の歩み（1985）

第50条の第九項に「屋外遊技場には、砂場、滑台及びぶらんこを設けること」と規定された。

法的に規定される前から、すべり台は幼稚園や保育所に設置されてはいた。しかし、改めて備えるべきものとして規定されたことで、保育環境におけるすべり台の役割が明確になった。当時の幼稚園教育指導書には、すべり台についての以下のような記述が見られる。

「幼稚園教育指導書 領域編 健康」（1969）には、第3章「指導の具体的なねらい」の中の「2 いろいろな運動に興味を持ち、進んで行なうようになる」に「（5）すべり台、ぶらんこなどで遊ぶ」と示され、第5章「経験や活動の例」として3歳児を対象としたすべり台の具体的な指導例が挙げられている。また、「同指導書 領域編 社会」（1968）には第3章「指導の具体的なねらい」の「2 社会

生活における望ましい習慣や態度を身につける」の「10 遊びのきまりを守る」の中で、きまりを守るようになる過程において「はじめは、すべり台やぶらんこなどを順番に守って交替できるようにし、『かごめ、かごめ』や鬼遊びなどの簡単な遊びの決まりが守れて、遊びを楽しむことができるようにする」との記述がある。その他、「同指導書 領域編 自然」（1970）の第3章「指導の具体的なねらい」の中の「2 身近な自然の事象などに興味や関心を持ち、自分で見たり考えたり扱ったりしようとする」の中で、使い方の工夫として「ぶらんこやすべり台などの遊具を使うとき、動かしたり止めたり速さを調整したりするのを工夫したり」という記述や、第4章「指導場の留意点」では領域のねらいを達成するための環境として、使用に適した遊具としてすべり台が位置付けられている。このように、設置が義務付けられたこともあり、それまでも使用されていたすべり台に領域を超えてその意義が後から付与されたことが推測できる。

この時期の記録写真にはすべり台が他の機能をもつ遊具と組み合わせられているものが多く見られるようになる。（図7）はジャングルジムやすべり台、太鼓橋、平均台などが組み合わせられた総合遊具として1972（昭和47）年の記録写真で確認できたもので、すべり台は遊具の一部として使われている。また、ローラーすべり台（図8）は3歳児専用の総合遊具として1973（昭和48）年に設置されたとされている。いずれも鉄製のパイプを組み合わせで作られている。

1956（昭和31）年に制定された「幼稚園設置基準」の第10条により、幼稚園に備えるべきものとして規定されたすべり台であったが、1995（平成7）年の改正によってこの条項からは具体的な設置遊具に関する記述が削除された。これは、1988（昭和63）年の「児童福祉施設最低基準」の改正、そして1993（平成5）年の「都市公園法施行令」の改正で、児童遊園や児童公園に設置義務のあったすべり台を含んだ具体的な遊具の記述が削除されたこととの関連もあることが推測される。これらの点について荻須ら（2004）は「近年、多様な遊具が製造されているうえ、主な利用者である幼児や小学校低学年児童の遊具に対する興味も変化してきていることから、特定の遊具の設置の基準を避けたことによる」

と指摘している。これは昭和時代に、すべり台がそれ単独で遊具として存在するだけでなく、他の遊具との組み合わせた総合遊具などの形で存在するようになったことも背景にあると推察できる。

このようにして、具体的な設置の規定は無くなった遊具ではあるが、すべり台と子どもの遊びとの関係については、安全という側面からの調査や検討がなされてきている^{注14)}。日本スポーツ振興センター学校災害防止調査委員会報告(2021)によると、認定こども園・保育所では設置率が一番高い固定遊具であり、幼稚園においても鉄棒の次に設置率の高い固定遊具と報告されている。設置率の高い遊具である一方で、事故の多い固定遊具でもある。消費者庁(2016)の報告では、12歳以下の子どもが公園や学校などにある遊具で負傷した事故のうち、遊具の種類ではすべり台での事故が最も多かったことが報告されている。また、国土交通省(2014)の「都市公園における遊具の安全確保に関する指針(改訂第2版)」では、子どもの遊具利用の特徴として、「①子どもは、さまざまな遊び方法を思いつくため、実際の使われ方などを参考に一定の幅を想定する必要がある」(国土交通省、2014)として、その参考例3つのうち2つは「すべり台を複数人数で滑る。」「すべり台を腹這いになり頭から滑る。」とすべり台について書かれている。また、「②子どもにとって、遊具を本来の目的とは異なる遊びに用いることは、刺激的でチャレンジ性の高い遊びになるが、その反面、事故につながるおそれもある」(国土交通省、2014)として、その参考例3つのうちのひとつとして「すべり台の滑降面を駆け上がる。」を挙げている。

安全面でのリスクが高いとされる固定遊具ではあるが、すべり台は依然として、子どもたちの遊びとつながりのあるものとして形を変えながらも現存し、子どもたちに利用される遊具となっている。

(2) 保育用品としてのすべり台

保育用品の販売カタログでは、1918(大正7)年のフレーベル館の教材カタログには「軽便すべり台」という名称で商品化されたものが確認できた。これは本調査において教材カタログにすべり台という表記が見られたのはフレーベル館のものが最古であった。

その後の1927(昭和2)年のフレーベル館の「幼

稚園用品目録」には「運動具」の中の「多数共同運動具」という項目に、以下に示す4種類のすべり台の記載がある。昭和13年には従来の木製のすべり面を鉄製パイプにした「パイプ滑台(実用新案登録)」(図9)が開発され販売されている。

- ・米国式鉄製廻転滑台 一基400円 高さ9尺、滑走距離32尺、所要面積1坪半
- ・大型鉄製滑台 一基85円 滑走距離10尺
- ・小型鉄製滑台 一基28円 滑走距離6尺余
- ・滑台(木製) 一基60円

米国式鉄製廻転滑台(図10)は、大正時代に明治神宮外苑に設置されていた廻転型の大型すべり台に似ていること、公園のすべり台に比べ高さが低くなっていることから、公園に設置をされていたものをモデルとして保育用品として販売をしたのではないかと推測できる。また、鉄製滑台が木製滑台より

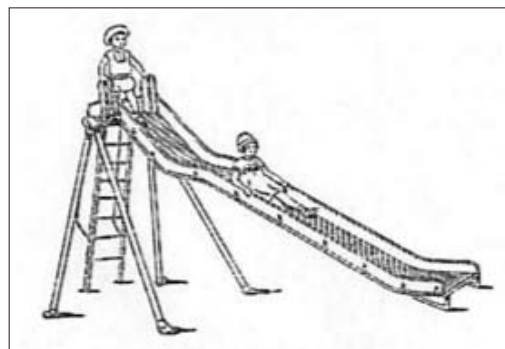


図9

出典：フレーベル館100年史(2007)



図10

出典：フレーベル館70年史(1977)

も安い価格設定になっていること、すべり台のすべり面を鉄パイプにした商品を開発していることなどから、鉄製品の加工が木製品に比べてコストが安くなってきた影響だと推測できる。

そして、1939（昭和14）年のカタログは名称が「保育用品目録」に変わり、そこには「運動具」の中の「共同運動具」という項目に、すべり台を含む運動具として以下に示す7種類がある。

- ・コンビネーション枠登（実用新案登録第110774）
- ・鉄製廻転滑　・曲線滑台　・大型鉄製滑台
- ・小型鉄製滑台　・実用新案登録パイプ滑台
- ・滑台付太鼓梯子

今回の調査で得られた記録の中では複数の遊具が合わさって作られた遊具が昭和30年代に「総合遊具」という名称で確認することができたが、保育用品としてはコンビネーション枠登（図11）という名称で「ジャングルジム+すべり台」という遊具が開発されている。

また、すべり台が保育用品として子どもたちが共同で遊ぶ「共同遊具」という名称になっていることから遊具の開発においても遊び方ということが検討されていたことが推察できる。

フレーベル館100年史には、それより先の1929（昭和4）年に「滑り台、ぶらんこ、シーソーを組み合わせた鉄製運動遊具」としてコンビネーション運動具（図12）が商品として発売されたという記録も確認できた。

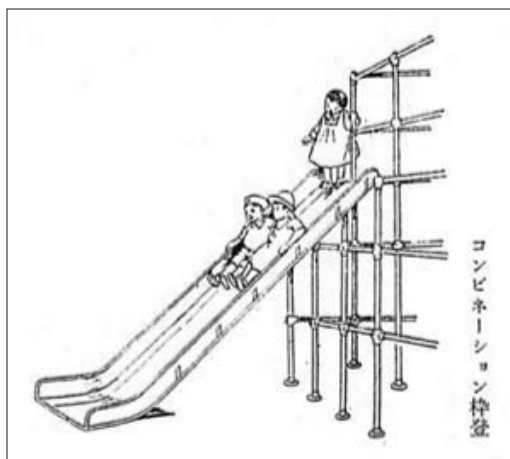


図11

出典：フレーベル館70年史（1977）

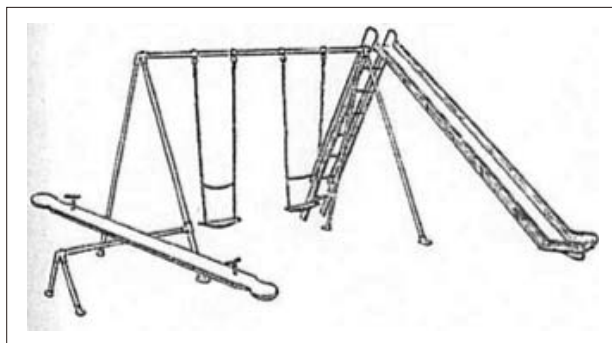


図12

出典：フレーベル館100年史（2007）

戦後の1949（昭和24）年になるとカタログの名称は引き続き「保育用品目録」となっている。項目が「運動具」から「運動遊具」となり、その中にすべり台の記載があるのは次の2品目となっている。

●運動遊具

- 共同ジャングル 29,000円 ジャングルの頂上にすべり台を取り付けたもの
- 小型鉄製滑り台 13,000円 高さ1.3m、奥行き1.5m、滑走距離2m 重量109kg

他の年代のカタログよりも項目数や紹介されている商品数が少ないのは、第二次世界大戦後の混乱期の影響もあるかと推測できる。

昭和52年のカタログ「保育用品目録」では、項目が「運動遊具」から「運動遊具類」となり、その中ですべり台は項目として〈室内滑り台〉には2種類、〈すべり台〉には7種類の品目があり、屋外で使用するすべり台については、滑り面が「木製」と「プラスチック製」の2種類から選択できるようになっている。そして、〈乳幼児用遊具〉という項目が新たに作られ、その中に乳幼児用滑り台という品目がある。この時期に乳幼児用品という品目が分けて発売された背景には、1978（昭和53）年に幼稚園児数がピークアウトしたことにより、以降の保育用品のニーズが乳幼児全般になることに対する開発となったことが推測できる。

●運動遊具類

- 〈室内滑り台〉
- 木製滑り台 23,000円 踊り場高さ80cm
- 全長200cm 滑走距離155cm

小型滑り台 67,000円 踊り場高さ100cm
 全長250cm 滑走距離200cm
 〈滑り台〉
 放射型滑り台 331,000円 高さ300、滑り面18×40×400cm
 大型滑り台 高さ260、滑り面18×40×400cm
 滑り面プラスチック 193,000円
 滑り面木製 183,000円
 中型滑り台 高さ210、滑り面18×40×300cm
 滑り面プラスチック 154,500円
 滑り面木製 148,000円
 中富士型滑り台 高さ250、全長600、滑り面18×40×300cm
 滑り面プラスチック 257,000円
 滑り面木製 224,000円
 大富士型滑り台 高さ300、全長760、滑り面18×40×400cm
 滑り面プラスチック 307,000円
 滑り面木製 262,000円
 一回転滑り台 619,000円 高さ400、滑り面20×40×650cm
 二回転滑り台 1,492,000円 高さ595、滑り面20×40×1,160cm
 〈乳幼児遊具〉
 乳幼児用滑り台 85,000円
 全長230cm 踊り場高さ50×幅43×長さ30cm
 階段 蹴上げ10×幅47×奥行20cm×5段
 滑り面 高さ19×幅43×長さ110cm

また、別途〈複合遊具〉という項目ができ、すべり台の要素が含まれるものが2種類、品目として挙げられている。「コンビネーションたいこばし」は1939（昭和14）年のカタログにある「滑台付太鼓梯子」と同じ形態のものだと考えられるが、滑り面がプラスチックのものと木製のものの2種類の設定の設定となっている。

〈複合遊具〉
 コンビネーションたいこばし 高さ210、滑り面15×40×300cm

滑り面プラスチック 172,000円
 滑り面木製 165,000円
 ダブルリングスライド 250,000円
 高さ250、幅260、奥行430、滑り面18×40×300cm

すべり台の普及とともに、当初は木製で必要に応じて作られていたものが、幼稚園や保育所の整備状況によってそのニーズが高まり、保育用品として販売されるようになった経緯を読み取ることができる。また、素材の変化は耐久性や加工のしやすさ、生産コストなどの変化の影響を受けていることが推測できる。

4 総合考察

本稿では、保育施設にすべり台が浸透してきたプロセスについて、第一に現存する写真記録を中心とした資料から、第二に保育用品の販売カタログからその歴史的変遷を概観した。

a. すべり台の意義の変遷

1876（明治9）年に創設された東京女子師範学校附属幼稚園の園庭には、築山（表記は「山」）が設置されていたもののすべり台の設置はなかった。1926（大正15）年の「幼稚園令」や「幼稚園令施行規則」が公布された頃には設置の義務はないものの、国内の広い範囲ですべり台が設置されていたことが確認された。1940（昭和15）年から2年間かけて中央社会事業協会社会事業研究所と愛育会愛育研究所が実施をした「本邦保育施設に関する調査」^{注13)}では、回答総数169園のうち92.1%の園がすべり台を設置しているとしている一方で、築山は7.7%でしかなかった。保育が恩物中心からの進展を模索する時期には、屋外での活動、特に運動的な遊びが重視され、屋外の設備も小山や築山などのほかに、ぶらんこやすべり台などの運動遊具が設置された。しかし、設置割合の報告からは、築山の高低差と斜面という身体的運動を促進する役割を実現するものとして、保育施設は築山ではなく、すべり台を独自に取り入れてきたのではないだろうか。このことは、すべり台が保育用品として販売をされる以前のものは加工のしやすい木製で、園ごとにそのデザインが異なることなどからも推察できる。設置の義務はな

かったものの、導入当初より、すべり台は身体的運動を促進するための役割をもつ遊具として保育の場に浸透していったことが示唆される。

第二次世界大戦後「幼稚園設置基準」や「児童福祉施設最低基準」によりすべり台は備えるべき遊具として公的に位置付けられた。それまでは身体的運動を推進する役割としての位置付けであったものが、道徳性や規範意識の芽生えや科学的思考を育むといった意義を付与されるようになり、遊具としての意義が広がった。その後の改正にて具体的な遊具名としての「すべり台」は公的には削除されたものの、すべり台はそのものとしてだけでなく、他の遊具との組み合わせの中でも現存し、「発達段階に応じた遊びを展開することができる幅広い年齢に対応した遊具」として、意義は各領域において子どもたちの育ちに影響するものとして役割を維持している。すべり台が遊具として浸透してきた背景には、このように公的に位置付けられたことで、新たな意義を付与されたことがその要因であることも示唆される。

b. 遊具としてのすべり台

保育施設にすべり台が取り入れられてから、第二次世界大戦前までの時期の写真記録からは、その大きさが青少年向けのものではなく、子どもの体の大きさに合わせてものになっていること、その多くは木材を使用したものであることが推察された。素材として木材が使われた背景には、すべり台が使用する子どもや園の実態などに合わせるためには加工がしやすいものが必要であり、当時の社会においてはそれが木材であったことが推測できる。1927（昭和2）年のフレーベル館の保育用品目録には鉄製のすべり台が掲載されており、その価格は木製品よりも安く設定されている。これだけのことから判断は難しいが、遊具に鉄を利用することが木を利用することと同程度の生産コストが見込めるようになったことが示唆される。このことと当時の鉄鋼市場の変化などとの関連については、今後の検討課題としたい。

すべり台の形状については早い段階から、すべり面が複数あるものや、すべり面の配置、他の遊具との一体化といった工夫が見られており、その多様性は企業による保育用品の開発にも影響を与えてきたことが示唆される。また総合遊具のきっかけとなったと言われている千葉大学教育学部附属幼稚園の総

合遊具の記録から、すべり台を含めた遊具の開発は、保育現場と企業とが相互に影響を与え合っていることが推測できる。昭和6年に設置された大阪市立愛珠幼稚園の廻旋すべり台は、国の重要文化財に指定された現在もすべり台として現存する。当時の写真と今の写真を比べると、滑り面の両脇に後から柵が取り付けられていることが確認できる。安全性を確保しつつ遊具の機能として子どもたちにとって意味のあるものとして位置付けられているからではないだろうか。

c. 今後の課題と展望

すべり台が事故の多い固定遊具でもある一方で、現在も設置率の高い遊具であることは、すべり台が保育用品として子どもたちの主体性や意欲を育む遊具であることを保育の場が認識をしているからではないかと推察できる。しかし、今回の調査では保育者がどのようにすべり台を捉え、その意義を認識しているかについては明らかにしていない。今後は、遊具としてのすべり台を保育者の視点から検討することを課題にしたい。

注

- 注1) 事故の防止と都市公園における安全管理の一層の強化を図るため、国土交通省が全国の都市公園等における遊具等の設置状況や安全点検の実施状況等について平成10年度から3年ごとに継続的に行っている調査である。以下で閲覧可能である。
https://www.mlit.go.jp/rep_ort/press/toshi10_hh_000187.html (情報取得 2021/12/29)
- 注2) 日本スポーツ振興センターが「学校（園）における固定遊具による事故防止対策」を調査研究課題とし、「固定遊具」について、事故の現状を把握するとともに、事故防止のための管理と指導についてまとめているものである。以下で閲覧可能である。
https://www.jpnsport.go.jp/anzen/anzen_school/bousi_kenkyu/tabid/1962/Default.aspx (情報取得 2021/12/29)
- 注3) すべり台の歴史についてはミネルヴァ書房の『発達』に全3回の連載がある。幼稚園の滑り台に関してはその第2回で報告されている。田実知子、橋彌和秀（2011）発達 32(125), 106-112
- 注4) 幼稚園の開設期から昭和にかけての保育内容の実態については以下の資料に詳しくまとめられている。倉橋惣三・新庄よしこ（1930）『日本幼稚園史』。臨川書店、日本保育学会（1968）『日本幼児保育史 第1巻』。フレーベル館
- 注5) 当時の幼稚園の状況、法的整備、教育統計などについては以下の資料をもとにした。文部省（1969）『幼稚園教育九十年史』、（1979）『幼稚園教育百年史』。ひかりのくに

- 注6) 1886 (明治19) 年に開園した長崎大学教育学部附属幼稚園の『百年のあゆみ』(1986)には当時の園舎図の中にすべり台と砂場が隣り合わせになったものが記載されている。
- 注7) 1887 (明治20) 年に開園した長崎市立長崎幼稚園の『創立100周年記念誌』(1993)には、開園当時の園舎とすべり台の様子が、移転後の昭和30年代の写真には滑り面が4面ある木製のすべり台の写真が記録されている。
- 注8) 1887 (明治20) 年に東京都文京区の誠之学校附属幼稚室として開設された園であり、大正10年に単独園として独立した際に東京で最初の独立幼稚園であったことから園名に「第一」がつくとされている。写真の記録はないが、「九十年のあゆみ」(1977)に記載の「子どもの好きな遊び今昔」アンケートの結果にこの記載があった。
- 注9) 保育法便覧は1911 (明治44) 年にフレーベル館を設立した高市次郎氏によって、恩物以外の保育用品を研究する過程の中で考えられた、保育の方針から保育の計画などがデザインされたものとして発行された。『フレーベル館七十年史』に掲載されている。
- 注10) これはお茶の水大学附属幼稚園の創立130年記念に発行された記念誌に柴崎正行氏が「幼稚園教育の役割とは」として寄稿したものに明治期の幼稚園の姿として書かれたものである。
- 注11) ここでは津守真氏が米国留学中に得た知見を「幼児の教育」に連載したものを中心に、欧州における幼児教育の歴史や明治大正期の日本の保育の歴史などがまとめられた『幼稚園の歴史』を参考にした。津守真・久保いと・本田和子 (1959). 『幼稚園の歴史』. 厚生閣
- 注12) このすべり台はフレーベル館の保育用品目録に掲載されているものである。『フレーベル館七十年史』(1977)には、幼稚園用品目録 (1927)、保育用品目録 (1936)、保育用品目録 (1949)、カタログ'77 (1977) が資料として紹介されている。目録の名称も、遊具の名称も時代に合わせて変化していることが確認できる。
- 注13) この調査結果は現在次の資料にまとめられている。中央社会事業協会社会事業研究所・愛育会愛育研究所 (編) (1978). 『大正・昭和保育文献集 第十四巻 調査資料集2 本邦保育施設に関する調査』. 日本らいぶらり
- 注14) 固定遊具の安全性やリスク管理については多くの調査が行われている。本論では (注2) に示したものの他、以下のものを参考とした。独立行政法人日本スポーツ振興センター学校災害防止調査研究委員会 (2012) 『学校における固定遊具による事故防止対策 調査研究報告書』 https://www.jpnsport.go.jp/a_nzen/Portals/0/anzen/kenko/jyouhou/pdf/koteiyuugu/koteiyuugu_1.pdf (情報取得 2021/12/29)
消費者庁 (2016) 『遊具による子供の事故に御注意!』 https://www.caa.go.jp/policies/policy/consumer_safety/release/pdf/160210kouhyou_1.pdf (情報取得 2021/12/29)

国土交通省 (2014) 「都市公園における遊具の安全確保に関する指針 (改訂第2版)」
<https://www.mlit.go.jp/common/000022126.pdf> (情報取得 2021/12/29)

謝辞

本論執筆のための史料確認や閲覧にあたり、野間教育研究所図書室、千葉大学教育学部附属幼稚園、フレーベル館千葉支社様には格別のご高配を賜りました。この場をお借りしまして、御礼を申し上げます。

付記

本研究は (公財) 野間教育研究所幼児教育研究部会として実施したものである。

引用文献

- 金子嘉秀・境愛一郎・七木田敦 (2013). 「幼児の固定遊具遊びにおけるルールの形成と変容に関する研究」『保育学研究』第51巻第2号, pp. 28-38.
- 岡山大学教育学部附属幼稚園 (1985). 『附幼百年の歩み』. 岡山大学教育学部附属幼稚園
- 荻須隆雄・齋藤敦能・関口準 (編) (2004). 『遊び場の安全ハンドブック』. 玉川大学出版
- 仙田満 (1998). 『こどものための遊び空間』. 市ヶ谷出版社
- 高村弘平 (1935). 『児童園の施設と遊戯器具』. 文書堂
- 龍田幸奈・西館有沙 (2019). 「幼児の固定遊具へのかかわり方とその発達的変化に関する観察研究：園庭の鉄棒と太鼓橋に着目して」『富山大学人間発達科学研究実践総合センター紀要』14号, pp. 103-112.
- 千葉大学教育学部附属幼稚園 (1983). 『千葉大学教育学部附属幼稚園80年のあゆみ』. 千葉大学教育学部附属幼稚園
- 長崎幼稚園 (1993). 『長崎幼稚園創立100周年記念誌』. 長崎市立長崎幼稚園
- 日本保育学会 (編) (1981). 『写真集 幼児保育百年の歩み』. ぎょうせい
- フレーベル館 (編) (1977). 『フレーベル館七十年史』. フレーベル館
- フレーベル館 (編) (2007). 『フレーベル館100年史』. フレーベル館
- 松崎幼稚園 (1998). 『松崎幼稚園創立80周年記念誌』. 学校法人協学園松崎幼稚園
- 文部省 (1969). 『幼稚園教育九十年史』. ひかりのくに
- 文部省 (1968). 『幼稚園教育指導書 領域編 社会』. フレーベル館
- 文部省 (1969). 『幼稚園教育指導書 領域編 健康』. フレーベル館
- 文部省 (1970). 『幼稚園教育指導書 領域編 自然』. フレーベル館
- 渡辺金太郎 (春風亭柳橋) (編) (1977). 『九十年のあゆみ』. 東京都文京区立第一幼稚園

資料 1

	写真記録年	和暦	園名	設立	設立西暦	所在地	名称	形状	素材	記録
1	1886	明治19年	長崎大学教育学部附属幼稚園	明治19年	1886	長崎県	すべり台		木製	園舎図
2	1893	明治26年	長崎市立長崎幼稚園 1	明治26年	1893	長崎県	すべり台		木製	写真
3	1907	明治40年頃	東京都文京区立第一幼稚園	明治20年	1887	東京都	すべり台			アンケート記録
4	1909	明治42年	岡山大学教育学部附属幼稚園	明治17年	1884	岡山県	すべり台	2本	木製	写真
5	1911	明治44年	大阪市立愛珠幼稚園	明治13年	1880	大阪府	すべり台			記述のみの記録
6	1913	大正2年	鳥根大学教育学部附属幼稚園	明治18年	1885	鳥根県	すべり台			写真
7	1915	大正4年	倉敷小学校附属幼稚園	明治20年	1887	岡山県	すべり台			園舎図
8	1917	大正6年	石井記念愛染園(幼稚園+託児所)	大正6年	1917	大阪府	すべり台	低い 2本		写真
11	1918	大正7年	学校法人隘学園 松崎幼稚園	大正7年	1918	山口県	すべり台	大型二連	鉄	写真
9	1918	大正7年	京都教育大学附属幼稚園	明治18年	1885	京都府	すべり台(園庭)	2面 富士山		園舎平面図
10	1918	大正7年	京都教育大学附属幼稚園	明治18年	1885	京都府	すべり台(室内)			園舎平面図
12	1920	大正9年	森村学園幼稚園	明治43年	1910	東京都	すべり台	大型三連		写真
13	1920	大正9年	岡山大学教育学部附属幼稚園	明治17年	1884	岡山県	すべり台	二連	木製	写真
14	1921	大正10年	西南学園 舞鶴幼稚園(福岡市)	大正2年	1913	福岡県	すべり台		木製	写真
15	1921	大正10年	西南学園 舞鶴幼稚園(福岡市)	大正2年	1913	福岡県	枠付き		木製	写真
16	1922	大正11年	京都市立城賀幼稚園	明治24年	1891	京都府	すべり台		築山	園庭図
17	1923	大正12年	神戸善隣幼稚園	明治28年	1895	兵庫県	すべり台	2本	木製	写真
18	1924	大正13年	家なき幼稚園 豊雀丘	大正13年	1924	大阪府	すべり台	1本	木製	写真
19	1924	大正13年	二葉保育園	明治33年	1900	東京都	すべり台	下が物置 富士山	木製	園舎平面図 写真
20	1925	大正末期	平安幼稚園	大正4年	1915	京都府	すべり台	1本	木製	写真
21	1926	大正15年	北九州市立小倉幼稚園	明治23年	1890	福岡県	すべり台 二連		木製	写真
22	1927	昭和2年	大阪教育大学附属幼稚園(平野)	明治25年	1892	大阪府	木製すべり台	富士山	木製	写真
23	1928	昭和3年	東京 阿佐谷幼稚園	大正14年	1925	東京都	すべり台	2列 木製	木製	写真
24	1929	昭和4年	本願寺学園 徳風幼稚園	明治35年	1902	富山県	すべり台	軽便 砂場横	木製	写真
27	1930	昭和5年	愛媛 三津浜幼稚園	昭和5年	1930	愛媛県	すべり台	鉄パイプ 1本	鉄	写真
26	1930	昭和5年	熊本大学教育学部附属幼稚園	大正4年	1915	熊本県	すべり台	砂場へ	鉄製	写真
25	1930	昭和5年	山形大学教育学部附属幼稚園	明治36年	1903	山形県	すべり台		木製	写真
28	1931	昭和6年	大阪市立愛珠幼稚園	明治13年	1880	大阪府	廻旋すべり台		鉄	写真
29	1932	昭和7年	熊本大学教育学部附属幼稚園	大正4年	1915	熊本県	すべり台	1本	鉄製	写真
30	1933	昭和8年	富山大学教育学部附属幼稚園	明治20年	1887	富山県	すべり台	1本	木製	写真
31	1933	昭和8年	下関市立豊浦幼稚園	明治25年	1892	山口県	すべり台	(ジャングルジム複合)		園舎平面図
33	1934	昭和9年	香川大学教育学部附属幼稚園	昭和8年	1933	香川県	3方すべり台		木・鉄製	写真
32	1934	昭和9年	熊本大学教育学部附属幼稚園	大正4年	1915	熊本県	すべり台	2本		写真
34	1935	昭和10年	千代田幼稚園	昭和9年	1934	静岡県	すべり台		木製	写真
35	1936	昭和11年	ときわ幼稚園			広島県	すべり台	台の下にブランコ	鉄	写真
36	1937	昭和12年	山形大学教育学部附属幼稚園	明治36年	1903	山形県	すべり台	2本	鉄製	写真
38	1938	昭和13年	日本大学附属幼稚園	昭和2年	1928	東京都	すべり台	2本 築山	コンクリ	写真
37	1938	昭和13年	弘前大学教育学部附属幼稚園	大正3年	1914	青森県	屋内すべり台	富士山	木製	写真
39	1940	昭和15年	京都市立生祥幼稚園	明治22年	1889	京都府	すべり台	2台	木製	写真 園庭図
40	1942	昭和17年	龍野市立龍野幼稚園	明治23年	1890	兵庫県	すべり台			写真 園庭図
41	1943	昭和18年	千代田区立番町幼稚園	明治22年	1889	東京都	すべり台	2列 コンクリート	コンクリ	写真
42	1945	昭和20年	千葉大学教育学部附属幼稚園	明治36年	1903	千葉県	ジャングルジム+すべり台		鉄	写真
43	1949	昭和24年	三重大学教育学部附属幼稚園	昭和4年	1929	三重県	すべり台	並行2本	鉄	写真
44	1950	昭和25年	千葉大学教育学部附属幼稚園	明治36年	1903	千葉県	室内すべり台			記述のみの記録
45	1950	昭和25年	千葉大学教育学部附属幼稚園	明治36年	1903	千葉県	すべり台つき太鼓橋			記述のみの記録
46	1951	昭和26年	岡山大学教育学部附属幼稚園	明治17年	1884	岡山県	広幅すべり台			写真
47	1953	昭和28年	熊本大学教育学部附属幼稚園	大正4年	1915	熊本県	大型すべり台		木製	写真
48	1953	昭和28年	長崎市立長崎幼稚園 2	明治20年	1887	長崎県	すべり台		木製	写真
49	1954	昭和29年	大分大学教育学部附属幼稚園	昭和6年	1931	大分県	すべり台		木製	写真
50	1954	昭和29年	大分大学教育学部附属幼稚園	昭和6年	1931	大分県	すべり台		木製	写真
51	1955	昭和30年	千葉大学教育学部附属幼稚園	明治36年	1903	千葉県	矢倉とすべり台	2列	木製	写真
52	1955	昭和30年	千葉大学教育学部附属幼稚園	明治36年	1903	千葉県	夢の城	幅広	鉄	写真
54	1955	昭和30年	三重大学教育学部附属幼稚園	昭和4年	1929	三重県	屋内すべり台	1本	木製	写真
53	1955	昭和30年	進徳幼稚園	明治31年	1898	山梨県	すべり台		木製	写真
55	1958	昭和33年	梅花幼稚園	昭和5年	1930	大阪府	設置型?		鉄2双	写真
56	1959	昭和34年	静岡大学教育学部附属幼稚園	昭和10年	1935	静岡県	すべり台付き太鼓橋		鉄	写真
57	1960	昭和35年	岡山大学教育学部附属幼稚園	明治17年	1884	岡山県	すべり台	富士山 広幅	木製	写真
58	1960	昭和35年	お茶の水女子大学附属幼稚園	明治8年	1876	東京都	築山から	築山	石	写真
59	1961	昭和36年	三重大学教育学部附属幼稚園	昭和4年	1929	三重県	すべり台	2本	鉄	写真
62	1962	昭和37年	大阪教育大学附属幼稚園	明治25年	1892	大阪府	すべり台	廻旋 2本	鉄製	写真
60	1962	昭和37年	京都市立城賀幼稚園	明治24年	1891	京都府	総合遊具 すべり台			園庭図
63	1962	昭和37年	双葉保育園			沖縄県	すべり台	富士山	鉄	写真
61	1962	昭和37年	大分大学教育学部附属幼稚園	昭和6年	1931	大分県	廻旋すべり台			園庭図
64	1963	昭和38年	岡山大学教育学部附属幼稚園	明治17年	1884	岡山県	総合遊具		鉄	写真
66	1964	昭和39年	香川大学教育学部附属幼稚園	昭和8年	1933	香川県	コンクリート築山		コンクリ	写真
65	1964	昭和39年	神戸大学教育学部附属幼稚園	明治37年	1904	兵庫県	総合遊具	2本	鉄	写真
67	1964	昭和39年	岡崎市立梅園幼稚園	明治33年	1900	愛知県	すべり台 バイブ廻旋型		鉄	写真
68	1965	昭和40年	大阪市立西船場幼稚園	明治22年	1889	大阪府	すべり台		鉄	写真
70	1966	昭和41年	千葉大学教育学部附属幼稚園	明治36年	1903	千葉県	総合遊具	直線 曲線 幅広	鉄・樹脂	写真
69	1966	昭和41年	徳島大学教育学部附属幼稚園	明治26年	1893	徳島県	すべり台付き太鼓橋		鉄	写真
71	1970	昭和45年	大阪市立西船場幼稚園	明治22年	1892	大阪府	総合遊具	鉄パイプすべり台	鉄	写真
72	1972	昭和47年	徳島大学教育学部附属幼稚園	明治26年	1893	徳島県	総合遊具		鉄	写真
73	1972	昭和47年	鳴門教育大学附属幼稚園	明治26年	1893	徳島県	大型総合遊具		鉄	写真
74	1973	昭和48年	岡山大学教育学部附属幼稚園	明治17年	1884	岡山県	3歳児用総合遊具	ローラーすべり台	鉄	写真
75	1977	昭和52年	鹿児島大学教育学部附属幼稚園	明治12年	1879	鹿児島県	廻旋すべり台			園庭図
76	1980	昭和55年	昭島東幼稚園	昭和34年	1959	東京都	すべり台	鉄パイプ	鉄	写真
77	1984	昭和59年	京都教育大学附属幼稚園	明治18年	1885	京都府	すべり台	パイプ型	鉄製	写真
78	1985	昭和60年	山形大学教育学部附属幼稚園	明治36年	1903	山形県	廻旋すべり台		鉄	写真
79	2015	平成27年	熊本大学教育学部附属幼稚園	大正4年	1915	熊本県	木製すべり台		木製 バイブ	写真